Research Monograph Series

『型の存在論』

――生成の位相存在論における印・無名性・文化生成の基礎理論――

Ontology of Kata:

A Foundational Theory of Mark, Namelessness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

Ontology of Kata:
A Foundational Theory of Mark, Namelessness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology; GTO）の理論体系を拡張し、日本文化において長らく実践されてきた「型（かた）」を存在論の基礎概念として再定義することを目的とする。

近代西洋の存在論は、存在を実体（substance）、本質（essence）、あるいは形式（form）として把握する傾向を持ってきた。それに対して本研究は、存在を固定的対象としてではなく、自己と自己以外との関係が反復可能となる生成構造として理解する。

本論文では、まず「印（しるし）」を、自己と自己以外との位相差を生成する最小単位として定義する。印は単なる記号ではなく、自己を自己以外へ開く存在論的契機である。

しかし、印は一回限りの出来事では文化を形成しない。印が時間を超えて反復されるためには、その作者性が自己から切り離される必要がある。本研究では、この状態を「無名性」と定義する。無名性とは、名前が失われることではなく、生成が個人を超えて持続する存在様態である。

さらに、無名性によって持続した印は、共同体において反復可能な生成構造として定着する。本論文では、この構造を「型」と呼ぶ。

したがって、本研究における型とは、単なる様式や形式ではない。

型とは、無名性が反復可能な生成アーキテクチャとして現象した存在論的構造である。

この観点から見ると、神道のしめ縄、富士山信仰、密教の印契・曼荼羅、浄土真宗の称名念仏、和歌、茶道、武道、日本建築、さらには現代のWeb Installationやインターフェイス芸術までが、一つの生成構造として理解できる。

最後に本論文は、「逆問題芸術」を型の存在論から再解釈する。逆問題芸術とは、完成した形から、その背後にある型と無名性を鑑賞者自身に生成させる芸術であり、認識の生成そのものを設計する存在論的アーキテクチャである。

本研究は、日本文化を歴史的・民族的特殊性としてではなく、生成の位相存在論を具体的に実装した存在論的実践として位置付けることを試みるものである。

キーワード

生成の位相存在論；型；印；無名性；文化生成；インターフェイス存在論；逆問題芸術；自己以前性；人間以前性；神道；密教；和歌；アーキテクチャ；生活即芸術；Web Installation

目次

Contents

第0章 Methodological Note（方法論的序論） 1
第1章 印の存在論.....3
第2章 型の存在論.....8
第3章 無名性の存在論 14
第4章 型と日本文化.....19
第5章 型のアーキテクチャ 25
第6章 生成の位相存在論との統合.....31
第7章 生成学への展開 36
結論.....41
参考文献 43
方法論的声明.....44

第0章　Methodological Note（方法論的序論）

本論文は、「型（かた）」を日本文化に固有の伝統概念として紹介することを目的とするものではない。

本研究が試みるのは、「型」を存在論の基礎概念として再構成することである。

生成の位相存在論では、存在とは固定された実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用を通して絶えず生成される位相的関係であると定義される。しかし、この理論にはなお一つの問いが残されていた。

生成はいかにして時間を超えて持続し、文化となるのか。

個々の生成は一回限りの出来事として生起する。しかし、人類の歴史には、世代を超えて反復される実践が存在する。神道の祭祀、和歌、茶道、武道、日本建築などは、その担い手が交代し続けながらも、なお同一性を保持している。

従来の存在論では、この持続性は制度、伝統、規範、あるいは文化的慣習として説明されることが多かった。しかし、本研究はそれらを二次的な現象と考える。

より根源的には、それらは生成が反復可能となる構造として理解されなければならない。

本論文は、その構造を「型」と呼ぶ。

ここでいう型とは、既存の様式や固定化された形式ではない。

型とは、自己と自己以外との生成関係を反復可能にする存在論的アーキテクチャである。

この定義により、本研究は「型」を芸術論・文化論・宗教論に限定することなく、生成の位相存在論を具体的な文化実践へ接続する中核概念として位置付ける。

さらに、本研究は「型」の成立条件として「無名性」を導入する。生成は個人の所有物である限り文化にはならない。生成が共同体へ継承されるためには、その作者性が後景化し、自己を超えた存在として受け継がれる必要がある。この存在様態が無名性である。

したがって、本論文の基本命題は次のように要約される。

印は生成の契機である。無名性は生成の持続である。型はその持続が反復可能となった存在論的アーキテクチャである。

この命題を軸として、本論文は生成・文化・宗教・芸術・建築・インターフェイスを統一的な存在論のもとで再解釈する。

第1章　印の存在論

1.1　印とは何か

生成の位相存在論において、存在は固定された実体ではない。

存在とは、自己・自己以外・環境との相互作用によって絶えず生成される位相的関係である。

この立場に立つならば、人間が世界と最初に接続する契機もまた、対象の認識ではなく関係の生成として理解されなければならない。

本論文では、その最小単位を**印（しるし）**と呼ぶ。

ここでいう印とは、単なる記号（sign）でも象徴（symbol）でもない。

印とは、

自己が自己以外に働きかけることによって、自己と自己以外との位相差を生成する最小の存在論的契機である。

したがって、印は情報を伝達するために存在するのではない。

印は、存在を生成するために存在する。

1.2　印と自己生成

自己は孤立して成立するものではない。

自己は常に自己以外との関係の中で生成される。

しかし、この関係は自己の内部から自然発生するものではない。

自己が世界へ何らかの働きかけを行うとき、

初めて

「自己」

と

「自己以外」

が同時に成立する。

例えば、

石を積む。

木に縄を掛ける。

壁へ線を描く。

名前を刻む。

これらはいずれも物理的行為である。

しかし存在論的には、それらは世界に印を与える行為である。

印が刻まれた瞬間、

自然は単なる自然ではなくなる。

同時に、

印を刻んだ自己もまた、

その行為を通して自己として生成される。

つまり、

印は自己だけを生成するのではない。

印は自己と自己以外を同時に生成する。

これが印の存在論的特徴である。

1.3　印と自然

印は人工物だけに成立するものではない。

むしろ人類史において、

印は自然との関係の中から誕生した。

一本の木。

一つの岩。

一つの山。

一本の川。

それらは自然そのものである。

しかし、

しめ縄が掛けられた瞬間、

その木や岩は、

単なる自然ではなくなる。

重要なのは、

木が変化したことではない。

変化したのは、

人間と自然との関係である。

つまり、

印とは対象を変える行為ではなく、

関係を生成する行為なのである。

1.4　印と自己以外

自己は、

自己だけでは自己を認識できない。

自己は必ず、

自己以外との関係を必要とする。

ここでいう自己以外とは、

単に他者だけではない。

自然。

共同体。

歴史。

文化。

死者。

未来。

神。

人工知能。

これらすべてが、

自己以外として現れる可能性を持つ。

印は、

自己をこれら自己以外へ開く契機である。

つまり、

印とは、

自己を自己以外へ接続するインターフェイス

なのである。

この意味で、

インターフェイス存在論における接続は、

印によって初めて成立する。

1.5　印と神聖性

神道におけるしめ縄は、

神を表現しているわけではない。

しめ縄は、

自然物を神へ変える魔術でもない。

しめ縄とは、

自己が自然に対して印を与えることによって、

自然全体との関係を生成する存在論的実践である。

同様に、

密教の印契（ムドラー）は、

身体によって宇宙との接続を生成する印である。

浄土真宗の「南無阿弥陀仏」は、

言葉によって自己を阿弥陀仏との関係へ置く印である。

これらは宗教的儀礼として異なる形式を持つが、

存在論的には共通している。

それらはすべて、

自己を自己以外の全体へ開く印

なのである。

したがって、

神聖性とは、

対象そのものの属性ではない。

神聖性とは、

印によって生成される関係の位相である。

1.6　印から無名性へ

しかし、

印は一度刻まれただけでは文化にはならない。

一人の行為は、

その個人に属している限り、

なお私的な出来事である。

それが世代を超えて反復され、

共同体によって継承されるとき、

印は次第に作者から切り離される。

ここで重要なのは、

作者が消えることではない。

作者が特定されなくなることによって、印は個人を超えた存在となる。

この存在様態を、

本研究では無名性と呼ぶ。

したがって、

印は存在生成の出発点であり、

無名性はその生成が共同体へ開かれた最初の位相である。

この無名性が時間を超えて反復可能な構造へと成熟したとき、初めて「型」が成立する。

ゆえに、印は単なる痕跡ではなく、文化生成の起点であり、本論文全体を貫く最初の存在論的契機として位置づけられる。

第2章　型の存在論

2.1　型とは何か

本章では、本論文の中心概念である「型（かた）」を存在論的に定義する。

一般に「型」は、形式、様式、作法、パターンなどを意味する言葉として理解されている。しかし、その理解では型は既に完成された結果として把握される。

本研究では、この理解を根本的に転換する。

型とは完成した形式ではない。

型とは、

生成を反復可能にする存在論的アーキテクチャである。

この定義において重要なのは、型は「何であるか」を規定するものではなく、「いかに生成され続けるか」を可能にする構造であるという点である。

したがって型は、存在の結果ではなく、存在生成の条件である。

2.2　型と形

日本文化では「型」と「形」はしばしば混同される。

しかし、本研究では両者を明確に区別する。

形とは、

その都度現れる個別具体的な存在の現象である。

これに対して型とは、

その形を繰り返し生成可能にする構造である。

つまり、

形は一回性であり、

型は反復性である。

形は可視であり、

型は不可視である。

形は結果であり、

型は生成条件である。

したがって、

人間はまず形を見る。

しかし、

その背後には必ず型が存在する。

この意味で、

型は形よりも存在論的に先行している。

2.3　型と反復

存在は一度だけ生成されても文化にはならない。

文化となるためには、

同じ生成が繰り返される必要がある。

しかし、

ここでいう反復とは、

同一性の反復ではない。

毎回異なる状況。

毎回異なる身体。

毎回異なる時間。

それにもかかわらず、

生成そのものは持続する。

これが型である。

茶道では、

同じ所作は二度と存在しない。

しかし、

茶道は毎回茶道として成立する。

武道でも、

一つとして同じ動きは存在しない。

しかし、

型は失われない。

つまり、

型とは、

差異を許容しながら生成を持続させる構造

なのである。

2.4　型と身体

型は、

知識ではない。

情報でもない。

身体を通して継承される。

この点において、

型は西洋近代的な知識概念とは異なる。

身体は型を理解してから動くのではない。

身体は型を反復することによって、

初めて型に気づく。

つまり、

身体は型を知るのではなく、

型そのものになる。

ここに日本文化の特徴がある。

茶道。

能。

武道。

建築。

盆栽。

職人技。

これらはいずれも、

身体によって型が継承される実践である。

2.5　型と無名性

型は、
誰か一人が所有するものではない。
もし型が一人の所有物であるなら、
それは技術であり、
文化ではない。
型は、
作者を超えて初めて型となる。
ここで、
本研究は一つの命題を提示する。
無名性に気づかない限り、人は型に気づくことはできない。
人は最初、
形を見る。
次に、
その形を生み出した個人を見る。
しかし、
さらに深く理解すると、
そこには個人を超えて反復され続けた構造があることに気づく。
それが型である。
したがって、
型とは、
無名性が可視化された生成構造
なのである。

2.6　型と逆問題

ここで本研究は、

逆問題芸術との理論的接続を行う。

逆問題とは、

結果から原因を生成する認識構造である。

型もまた、

直接見ることはできない。

人間はまず形を見る。

その形から型を推定する。

さらに、

その型が無名性の中で生成されてきたことを理解する。

つまり、

認識の運動は、

形 → 型 → 無名性

という逆方向の生成となる。

これは存在の生成順序とは異なる。

存在論的には、

印 → 無名性 → 型 → 形

という順序である。

ここに逆問題芸術の存在論的基盤がある。

逆問題芸術とは、

完成した作品を提示する芸術ではない。

それは、

現れた形を契機として、

鑑賞者自身が型を生成し、

さらに無名性へ到達する認識過程そのものを設計する芸術である。

したがって逆問題芸術とは、

型を可視化する芸術ではなく、型を生成させる芸術である。

2.7　型は存在論的アーキテクチャである

以上の議論から、本研究は型を次のように定義する。

型とは、印によって開始された存在生成が、無名性を経て共同体の中で反復可能となった存在論的アーキテクチャである。

この定義により、「型」は様式や作法の名称ではなく、生成の位相存在論を文化・宗教・芸術・建築・共同体へと実装する基礎原理として位置づけられる。

したがって、「型」は本論文における文化論の概念ではない。それは、存在が歴史を持ち、共同性を獲得し、世代を超えて持続することを可能にする生成そのもののアーキテクチャなのである。

第3章　無名性の存在論

3.1　無名性とは何か

本研究における無名性とは、単なる匿名性でも、作者不明でもない。

一般に無名とは、名前が存在しない状態を意味する。しかし、この理解では無名性は名前の欠如という消極的概念に留まる。

本論文では、この理解を根本的に改める。

無名性とは、生成が個人を超えて持続する存在様態である。

したがって無名性とは、個人が消滅することではない。

むしろ、個人によって開始された生成が、その個人の所有から解放され、共同体・歴史・文化へと継承されることである。

無名性とは、作者の否定でも、作者性の超克でもない。

それは、作者性を包摂しながら、

生成を個人への帰属を超えて持続させる存在様態である。

3.2　印から無名性へ

前章で論じたように、印は自己が自己以外へ働きかける最初の存在論的契機である。

しかし、印は一回限りでは文化にならない。

例えば、一本の木に縄を掛ける。

最初にそれを行った人物は確かに存在したはずである。

しかし現在、

その人物の名前を知る者はいない。

にもかかわらず、

しめ縄という実践は現在も持続している。

ここで持続しているのは、

個人ではない。

印である。

つまり、

印は共同体によって反復されることで、

作者から独立する。

この独立した状態が、

無名性である。

したがって、

無名性とは、

印が個人の所有を離れ、

共同体の生成となった状態なのである。

3.3　無名性と自己以前性

自己以前性とは、

自己が自己として成立する以前の生成位相である。

この自己以前性は、

単なる乳幼児期や生物学的発達段階を意味するものではない。

自己以前性とは、

自己が無数の自己以外によって既に支えられているという存在論的事実を意味する。

言語。

文化。

宗教。

建築。

風景。

共同体。

身体技法。

これらはいずれも、

自己が誕生する以前から存在している。

しかも、

その起源はほとんど無名である。

したがって、

自己以前性とは、

無名性の中へ自己が投げ入れられている存在様態なのである。

ここにおいて、

人間以前性と自己以前性は、

無名性によって統合される。

3.4　無名性と神道

神道は、

人格神を中心とする宗教ではない。

神は、

岩にも宿る。

木にも宿る。

山にも宿る。

川にも宿る。

ここで重要なのは、

それらを最初に神として祀った人物ではない。

重要なのは、

その行為が現在まで継承されていることである。

富士山も同様である。

富士山そのものが神聖なのではない。

無数の人々が、

富士山を神聖なものとして経験し、

その経験を継承してきた。

その反復が、

富士山を神聖な存在として成立させている。

したがって、

神道とは、

無名性が最も高度に制度化された文化実践の一つである。

そこでは、

神は人格ではなく、

無名性によって持続する生成そのものとして現象する。

3.5　無名性と文化生成

文化は、

個人によって創造されるものではない。

もちろん、

文化は個人の実践から始まる。

しかし、

その実践が個人に帰属している限り、

文化にはならない。

共同体がそれを反復し、

世代が継承し、

作者が後景化するとき、

初めて文化は成立する。

つまり、

文化とは、

無名性が時間として現象した存在様態である。

この意味で、

文化とは作品の集積ではない。

文化とは、

無名性が持続している状態なのである。

3.6　無名性への気づきと型の生成

ここで本研究は、

本論文全体を貫く命題を提示する。

無名性に気づかない限り、人は型に気づくことはできない。

人間はまず形を見る。

次に、

作者を見る。

しかし、

さらに深い理解に至ると、

作者を超えて持続している生成構造があることに気づく。

それが型である。

したがって、

型は知識ではない。

型とは、

無名性への気づきによって初めて現象する存在論的構造なのである。

ここに逆問題芸術の認識論的意義がある。

逆問題芸術は、鑑賞者に答えを与えるのではなく、形から出発し、その背後にある型、さらにその型を支える無名性へと認識を導く構造を設計する。したがって逆問題芸術は、作品を制作する芸術ではなく、無名性へ至る認識の生成を設計する芸術として理解される。

以上より、無名性は「型の存在論」において付随的な概念ではない。無名性は、印が文化へ、生成が歴史へ、個人が共同体へと移行するための根源的条件であり、型そのものを成立させる存在論的基盤なのである。

第4章　型と日本文化

4.1　型は文化を生成する

前章では、型を「無名性が反復可能な生成アーキテクチャ」と定義した。

この定義に立つならば、文化とは作品の集積ではない。

文化とは、

型が共同体の中で持続的に反復される生成過程そのものである。

したがって文化は保存されるものではない。

文化は、

その都度生成され続ける。

つまり、

文化とは生成の歴史である。

ここに日本文化の特徴がある。

日本文化は、

完成した理念を保存する文化ではなく、

型を反復することによって、

生成を持続させる文化なのである。

4.2　座と型

日本文化において「座」は単なる場所ではない。

座とは、

共同体が型を実践する位相である。

茶会。

歌会。

能舞台。

神事。

祭礼。

いずれにおいても、

座は物理空間ではない。

座とは、

関係が生成される存在論的空間である。

参加者は、

座へ入ることによって、

自己の立場を獲得する。

つまり、

座は個人を包摂する空間ではなく、

個人を生成する型なのである。

4.3　位と生成

日本文化では、

位（くらい）は固定された身分ではない。

位とは、

型の中で成立する関係的存在である。

例えば、

師。

弟子。

神職。

住職。

亭主。

客。

これらは人格ではない。

それぞれが、

型の中で生成される位なのである。

位は所有されない。

位は継承される。

つまり、

位とは、

型が人間を通して現象した関係なのである。

ここで重要なのは、

人が位を持つのではなく、

位が人を成立させるということである。

したがって、

位は存在論的には主体に先行する。

4.4　皇位とシラス

この視点から見ると、

皇位は人格ではない。

皇位とは、

日本という共同体が継承してきた型である。

もちろん、

歴代天皇は固有の人格を持つ。

しかし、

皇位そのものは、

一人の人格へ還元されない。

皇位とは、

歴史の中で持続する型なのである。

ここで重要なのは、

個人ではなく、

位が持続していることである。

この意味において、

皇位は無名性によって支えられている。

また、日本古来の「シラス」という統治観も、この文脈で理解できる。

一般にシラスは、統治の理念やあり方として語られる。しかし、本研究の立場からは、それは人格的支配ではなく、共同体全体との関係を持続させる型として理解される。

したがって、シラスとは、支配の技術ではなく、共同体と世界との関係を生成し続ける存在論的アーキテクチャである。

4.5　和歌と型

和歌は、

三十一文字という形式によって定義されるものではない。

五・七・五・七・七という配列だけでは、

和歌にはならない。

重要なのは、

その型が、

自然と人間との関係を生成し続けてきたことである。

山。

風。

花。

月。

雪。

四季。

これらは、

単なる自然描写ではない。

自然に印を与え、

自己と自然との関係を生成する存在論的実践なのである。

したがって、

和歌とは、

言葉による型ではない。

自己と自己以外との生成を反復する型なのである。

4.6　型としての宗教

神道の祭祀。

密教の印契。

曼荼羅。

真言。

浄土真宗の称名念仏。

これらは宗教儀礼として分類されることが多い。

しかし、

存在論的には共通している。

それらは、

信仰内容ではなく、

自己を自己以外へ接続する型である。

しめ縄。

鳥居。

印契。

念仏。

これらはすべて、

印から始まり、

無名性を経て、

共同体の型となった実践なのである。

したがって、

宗教とは、

教義以前に、

型によって存在を生成する文化実践なのである。

4.7　型と日本的アーキテクチャ

日本建築では、

完成した形よりも、

「納まり」が重視される。

納まりとは、

設計図には完全には記述できない。

現場で、

身体を通して、

職人同士が調整し、

最終的に関係が成立する。

この構造は、

本研究がいう型そのものである。

建築とは、

壁や柱ではない。

建築とは、

人間・自然・時間との関係を持続させる生成アーキテクチャなのである。

この意味で、日本建築は「空間」を設計するのではなく、「型」を設計する。

その型の中で、人は世界との関係を繰り返し生成し続ける。

4.8　日本文化は型の文明である

以上の考察から、本研究は、日本文化を次のように位置づける。

日本文化とは、型を媒介として自己と自己以外との生成関係を持続させる文明である。

ここでいう型は、伝統や慣習の別名ではない。それは、印から始まる生成が、無名性を経て共同体へ継承される存在論的アーキテクチャである。

したがって、日本文化の本質は、個人の創造性や制度の維持にあるのではない。自己・自然・共同体・歴史との関係を、型を通して絶えず更新し続けることにある。

この観点から見ると、神道・和歌・茶道・武道・建築・皇位・シラスは、それぞれ独立した文化現象ではない。それらはすべて、「型」を中心として存在生成を反復する、一つの文明的構造の異なる現れとして理解されるのである。

第5章　型のアーキテクチャ

5.1　作品から型へ

近代芸術は、作品を中心に発展してきた。

作品は作者によって制作され、作品そのものが芸術の本体であると理解される。

この理解では、

作品は完成した対象であり、

鑑賞とはその対象を解釈する行為となる。

しかし、本研究はこの前提を根本的に転換する。

芸術の本質は作品ではない。

芸術の本質は、型を生成することである。

作品とは、

型が一時的に現象した一つの形に過ぎない。

したがって、

作品は目的ではなく、

型を社会へ実装するための媒介なのである。

5.2　アーキテクチャとは何か

本研究でいうアーキテクチャとは、

建築物を意味しない。

アーキテクチャとは、

型が持続的に反復されるための存在論的構造である。

建築。

制度。

儀礼。

共同体。

Web。

人工知能。

これらはすべて、

人間と世界との関係を生成し続ける構造として理解される。

したがって、

アーキテクチャとは、

形を設計する技術ではなく、

型を持続させる生成装置なのである。

5.3　Web Installationと型

Web Installation は、

デジタル作品ではない。

また、

インターネット上の展示でもない。

Web Installation とは、

自己と自己以外との関係を生成するインターフェイスを現実へ実装するアーキテクチャである。

ここで重要なのは、

Webが作品なのではない。

Webが型なのである。

URL。

QRコード。

ディスプレイ。

建築。

スマートフォン。

これらはすべて、

型を現実へ接続するためのインターフェイスとして機能する。

したがって、

Web Installation は、

完成作品ではなく、

型が持続する環境そのものを設計する芸術なのである。

5.4　民宿狭山美学校

民宿狭山美学校は、

建築作品ではない。

宿泊施設でもない。

それは、

型を反復するアーキテクチャである。

宿泊者。

地域住民。

芸術家。

研究者。

偶然訪れた旅行者。

それぞれが異なる存在でありながら、

同じ空間の中で、

自己と自己以外との新たな関係を生成する。

ここで重要なのは、

何が展示されているかではない。

何が生成されるかである。

つまり、

民宿狭山美学校とは、

型を実践する存在論的インターフェイスなのである。

5.5　QRコードと印

QRコードは、

情報を保存するためだけの技術ではない。

本研究では、
QRコードを印として理解する。
QRコードを見ることによって、
人はスマートフォンを操作する。
画面が切り替わる。
現実空間と情報空間が接続される。
つまり、
QRコードとは、
自己を新しい位相へ移行させる印である。
そして、
その印が社会全体で反復されることによって、
QRコードは一つの型となる。
したがって、
QRコードとは、
情報技術ではなく、
存在生成を媒介する型なのである。

5.6　グラフィティと印

グラフィティは、
都市への印である。
壁に描かれた線や文字は、
単なる視覚表現ではない。
都市という匿名的空間に対し、
自己が自己以外へ働きかけた最初の契機である。
しかし、
時間が経つにつれて、
作者は忘れられる。

作品だけが残るのでもない。

都市そのものが変化する。

新たな描き手が現れ、

さらに印が重ねられる。

この反復によって、

グラフィティは一人の表現ではなく、

都市の型となる。

したがって、

グラフィティとは、

無名性が都市空間を生成するアーキテクチャなのである。

5.7　インターフェイス存在論との統合

インターフェイス存在論では、

存在とは接続によって生成される。

本研究は、

この理論をさらに発展させる。

インターフェイスは、

接続するだけではない。

インターフェイスは、

型を実装する。

印。

無名性。

型。

これらが、

インターフェイスによって、

現実へ持続的に実装される。

したがって、

インターフェイスとは、

情報の境界ではない。

存在生成を反復可能にする型のアーキテクチャなのである。

5.8　アーキテクチャは型を設計する

以上の議論から、本研究はアーキテクチャを次のように定義する。

アーキテクチャとは、型が共同体・空間・時間の中で持続的に生成されることを可能にする存在論的インターフェイスである。

この定義により、建築・Web Installation・民宿狭山美学校・QRコード・グラフィティは、異なる表現形式ではなく、共通して「型」を実装する実践として理解される。

したがって、美学者母の芸術実践は、個々の作品を制作することではなく、印から始まり、無名性を経て、型が社会の中で反復されるためのアーキテクチャを設計することにある。

この意味で、アーキテクチャは芸術の背景ではない。それ自体が、生成の位相存在論を現実へ実装する最も根源的な芸術実践なのである。

第6章　生成の位相存在論との統合

6.1　型は生成の持続原理である

『生成の位相存在論の公理系』において、本研究は存在を固定的実体ではなく、自己・自己以外・環境との相互作用によって絶えず生成される位相的関係として定義した。

そこでは、「存在はいかに生成するか」が中心的な問いであった。

しかし、生成だけでは文化や歴史は説明できない。

生成が一回限りの出来事であるならば、それは出来事として終わる。

にもかかわらず、人類には数千年にわたり継承されてきた宗教、芸術、建築、言語、共同体が存在する。

したがって、本研究は次の問いを導入する。

生成はいかに持続するのか。

この問いへの回答が、「型」である。

型とは、生成そのものを保存するものではない。

型とは、

生成を反復可能にする存在論的条件なのである。

6.2　自己外部化と型

『自己外部化の限界と存在生成』では、自己は自己を自己以外へ外部化することによって存在を生成すると論じた。

しかし、その外部化は作品を作ることだけを意味しない。

自己が自然へ印を刻む。

共同体へ参加する。

儀礼を反復する。

言葉を唱える。

建築を営む。

これらはすべて自己外部化である。

しかし、その外部化が文化となるためには、

個人の行為が反復可能な構造へ移行しなければならない。

つまり、

自己外部化の持続した姿が、

型なのである。

型とは、

自己外部化が共同体へ移行した存在様態である。

6.3　人間以前性・自己以前性と型

『人間以前性と自己以前性』では、自己は自己だけから成立するのではなく、自己以前の生成構造によって支えられていることを論じた。

本論文は、この議論をさらに展開する。

自己以前に存在するものとは何か。

それは、

無数の型である。

言語。

歩行。

食事。

祭祀。

挨拶。

文字。

建築。

共同体。

これらはすべて、自己が誕生する以前から存在している。

人間は、これらの型の中へ生まれる。

したがって、人間以前性・自己以前性とは、

型の世界への参与として理解される。

ここで「参与」という語を用いるのは、型が外部から強制される制度ではなく、実践を通じて自己がその生成に加わる構造だからである。

6.4　逆問題芸術と型

逆問題芸術は、本研究において新たな位置づけを得る。

従来、逆問題芸術とは、結果から原因を生成する芸術であった。

しかし、本論文はその原因をさらに明確にする。

人間が作品を見るとき、

最初に現れるのは形である。

しかし、その形だけでは芸術は理解されない。

鑑賞者は、

その背後にある型を推定する。

さらに、

その型を成立させた無名性へ到達する。

つまり、

逆問題芸術とは、

形から型を生成し、型から無名性を生成する認識の設計

なのである。

ここで逆問題芸術は、認識論と存在論を接続する。

存在は、

印 → 無名性 → 型 → 形

という順序で生成される。

認識は、

形 → 型 → 無名性

という逆方向で深化する。

この対応関係によって、逆問題芸術は単なる芸術手法ではなく、存在生成を追体験させる認識のアーキテクチャとして位置づけられる。

6.5　言語デリバティブ論と型

『言語デリバティブ論』では、言語は固定された意味体系ではなく、未来の可能性を現在へ折り込む生成空間として理解された。

この視点から見ると、言語そのものもまた型である。

文法。

語彙。

韻律。

和歌。

真言。

念仏。

これらはいずれも、意味を保存する装置ではない。

それらは、新たな意味生成を反復可能にする型である。

したがって、言語とは情報の媒体ではなく、

未来の生成を持続させるアーキテクチャなのである。

6.6　生成学への統合

以上の議論から、本研究は生成学の理論構造を次のように整理する。

第一基礎理論

生成の位相存在論の公理系

問い：

存在はいかに生成するのか。

第二基礎理論

型の存在論

問い：

生成はいかに持続するのか。

第三基礎理論

無名性の存在論

問い：

持続した生成はいかに文化・歴史・共同性となるのか。

この三者は独立した理論ではない。

それぞれが異なる位相から、同じ生成現象を記述している。

6.7　生成学の存在論的転回

本研究の結論は、生成の位相存在論を「存在の生成論」から「生成の持続論」へと拡張する点にある。

存在は生成されるだけではない。

生成は持続する。

持続は型となる。

型は共同体の中で反復される。

その反復が無名性を深め、文化・歴史・文明を形成する。

したがって、生成学とは、生成だけを扱う理論ではない。

生成・持続・継承・文化化を一つの存在論として統合する理論なのである。

ここで「型」は、公理系から演繹される単なる応用概念ではない。「型」は、生成が時間と共同体を獲得するための存在論的条件であり、生成の位相存在論を文化・宗教・芸術・建築・AIへと接続する中核概念として位置づけられる。

この意味において、『型の存在論』は『生成の位相存在論の公理系』を補完するものではなく、その理論を歴史・文化・文明へ展開する第二の基礎理論として、生成学全体の体系に組み込まれるのである。

第7章　生成学への展開

7.1　存在論から文明論へ

本研究は、「型」を存在論の概念として再定義することから出発した。

しかし、その射程は存在論にとどまらない。

印は自己と自己以外との位相差を生成する。

無名性はその生成を個人から共同体へ開く。

型はその生成を時間の中で反復可能にする。

そして文化とは、その型が歴史の中で持続している状態である。

したがって、

存在論・文化論・文明論は互いに独立した学問領域ではない。

それらは同一の生成構造の異なる位相なのである。

本研究は、この連続性を「型」の概念によって理論化した。

7.2　型と人工知能

人工知能は膨大な情報を学習できる。

しかし、

情報を保持することと、

型を生成することは異なる。

現在の人工知能は、

既存の形を高精度に再構成する能力を持つ。

しかし、

その形がどのような無名性の中で成立し、

どのような共同体的実践を通じて型となったのかを、

存在論的に経験しているわけではない。

したがって、

本研究の立場から見るならば、

人工知能は形を生成できても、

型そのものを生きることはできない。

ここでいう「生きる」とは、身体・共同体・歴史・自然との相互作用を通じて型を更新し続けることである。

今後のAI研究は、

知識の蓄積ではなく、

型の生成と継承という視点を導入することによって、

新たな展開を迎える可能性がある。

7.3　芸術の再定義

本研究は芸術を作品制作として理解しない。

芸術とは、

自己を表現することでも、

美を制作することでもない。

芸術とは、

型を生成することである。

さらに、

優れた芸術とは、

型を設計するだけではない。

その型を共同体へ開き、

作者を超えて持続可能にする。

したがって、

芸術作品とは完成物ではない。

芸術作品とは、

型が社会へ実装されるための契機である。

ここに、

生活即芸術、

Web Installation、

民宿狭山美学校、

逆問題芸術は統合される。

それらはいずれも、

型を現実へ実装する存在論的アーキテクチャなのである。

7.4　日本文化の存在論的意義

本研究は、

日本文化を特殊な民族文化として扱わない。

神道。

和歌。

茶道。

武道。

建築。

皇位。

シラス。

これらは歴史的には日本において発展した。

しかし、

本研究が注目するのは歴史的特殊性ではない。

そこに現れている生成構造である。

日本文化は、

完成した理念を保存する文化ではなく、

型を反復することによって、

自己と自己以外との関係を更新し続ける文化である。

したがって、

日本文化とは、

型の文明なのである。

7.5　型と未来

型は、

過去を保存するものではない。

型とは、

未来を生成する構造である。

同じ茶会は存在しない。

同じ祭りも存在しない。

同じ和歌も存在しない。

同じ建築も存在しない。

しかし、

型は持続する。

つまり、

型とは、

未来において新たな生成を可能にする存在論的条件なのである。

この意味で、

型は伝統ではない。

型は未来である。

7.6　生成学の新しい課題

本研究は、

生成学に新たな研究領域を提案する。

それは、

「型生成論（Theory of Generative Kata）」である。

型生成論は、

印がいかに型となり、

型がいかに共同体へ継承され、

文化・宗教・芸術・技術・人工知能へ展開されるかを研究する。

これによって、

生成学は存在生成だけでなく、

文明生成までを対象とする理論へ拡張される。

7.7　結語

生成とは、一回限りの出来事ではない。

生成が個人に留まるならば、それは経験で終わる。

生成が共同体へ開かれるとき、それは無名性となる。

無名性が時間を超えて反復されるとき、それは型となる。

型が歴史を通じて継承されるとき、それは文化となる。

文化が世界との新たな関係を生み続けるとき、それは文明となる。

したがって、本研究が示したのは、存在生成の一局面ではない。

本研究は、

印・無名性・型という三つの概念を通じて、存在・文化・文明を一つの生成構造として統一的に理解する存在論を提示した。

この立場から見ると、「型」は伝統を保存する形式ではなく、自己と自己以外との関係を歴史の中で絶えず更新し続ける存在論的アーキテクチャである。

生成の位相存在論は、存在が生成されることを明らかにした。本論文『型の存在論』は、その生成がいかに持続し、共同体へ継承され、文化・歴史・文明として展開するかを理論化した。

ゆえに、「型」とは単なる日本文化の概念ではない。

型とは、存在が歴史となるための条件である。

そして、その型に気づくことは、無名の他者が紡いできた生成の歴史に参与することであり、未来の生成へと新たな印を刻むことでもある。

結論

本論文は、「型（Kata）」を日本文化に固有の伝統概念としてではなく、生成の位相存在論を構成する存在論的基礎概念として再定義した。

従来、西洋存在論は存在を実体・本質・形式といった固定的対象として理解する傾向を持ってきた。一方、生成の位相存在論は、存在を自己・自己以外・環境との相互作用によって絶えず生成される位相的関係として捉える。しかし、この理論だけでは、生成がいかに時間を超え、共同体へ継承され、文化や歴史として持続するのかを十分には説明できなかった。

本研究は、この課題に対し、「印」「無名性」「型」という三つの概念を導入した。

第一に、本論文は印を、自己が自己以外へ働きかけることによって自己と自己以外を同時に生成する最小の存在論的契機として定義した。印は記号ではなく、存在生成の開始点である。

第二に、印は反復されることによって作者の所有から解放される。この状態を本研究は無名性と定義した。無名性とは、名前の欠如ではなく、生成が個人を超えて共同体・歴史・文化へと継承される存在様態である。

第三に、無名性によって持続した生成は、反復可能な構造として定着する。本研究はこの構造を型と呼ぶ。型とは様式や形式ではなく、自己と自己以外との生成関係を持続させる存在論的アーキテクチャである。

この視点から見ると、神道のしめ縄、富士山信仰、密教の印契・曼荼羅、浄土真宗の称名念仏、和歌、茶道、武道、日本建築、さらにはWeb Installationやインターフェイス芸術までが、一つの生成構造の異なる位相として理解される。

さらに本研究は、逆問題芸術を新たな位置づけで再定義した。存在の生成は、

印 → 無名性 → 型 → 形

という順序で展開する。一方、人間の認識は、

形 → 型 → 無名性

という逆方向の運動をたどる。逆問題芸術とは、この認識運動を設計し、鑑賞者自身が形から型を見出し、その背後にある無名性へ到達する経験を生成する芸術である。

この対応関係によって、逆問題芸術はAI論や芸術論に限定される概念ではなく、生成学全体における認識論的原理として位置づけられる。

本論文の理論的意義は、生成の位相存在論を「存在の生成論」から「生成の持続論」へと拡張した点にある。存在は生成されるだけではなく、その生成は共同体の中で反復さ

れ、型となり、文化・歴史・文明へと展開する。この持続構造を理論化したことが、本研究の中心的成果である。

したがって、「型」とは伝統を保存するための形式ではない。

型とは、生成を未来へ開き続ける存在論的条件である。

そして、型に気づくとは、無数の無名の他者によって継承されてきた生成の歴史に参与し、その歴史へ新たな印を刻むことである。

この意味において、本論文が提唱する「型の存在論」は、日本文化を説明する理論ではなく、存在・文化・歴史・文明を一つの生成構造として統一的に理解するための基礎理論である。

参考文献

著者自身の研究

Tanaka, T. (bigakusha-haha). Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 0.9, 2026.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular Contingency in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

理論的背景

Heidegger, M. Being and Time.

Heidegger, M. Identity and Difference.

Merleau-Ponty, M. Phenomenology of Perception.

Nishida, K. An Inquiry into the Good.

Nishitani, K. Religion and Nothingness.

Kūkai. The Ten Stages of the Development of Mind.

Dōgen. Shōbōgenzō.

Lévi-Strauss, C. The Savage Mind.

Geertz, C. The Interpretation of Cultures.

Ingold, T. Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture.

Alexander, C. The Timeless Way of Building.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。